第13回とくしま芸術文化賞

受賞者に聞く 4

奨励賞

山本 貴子さん（49）

ピアニスト

徳島市万代町5

「逆境に負けない」体現

「さまざまな出会いが演奏を支えてくれた」と話す山本貴子さん＝徳島市の自宅

徳島県内外の小中学校で学校コンサートを20年続けてきた。その数は223回にも及ぶ。自主公演のピアノリサイタルも今秋、20回目の節目を迎える。

「いつしか『20』という数字が目標になっていた。二つの活動が作用し合って継続できた。体力のある40代のうちに達成したいと考えていたので、賞と合わせて二重の喜び」

小松島市出身。富岡西高校を経て武蔵野音楽大を卒業した。ハンガリーの女性ピアニスト・トゥシャ先生の指導を受けたのを機に、卒業後、ハンガリーに留学。国立リスト音楽院で10年余り、研さんを重ねた。

ハンガリーに居た頃のことだ。日本よりも経済的に貧しい国。だが、音楽がいつも身近にあった。リスト音楽院では毎日、コンサートが開かれ、誰もが音楽を楽しめる土壌があった。

日本と何が違うのかと考えた時、音楽的な環境が違うと分かった。ハンガリーでは、音楽家は若い時に学校へ赴き、コンサートをすることが多いと聞く。

「自分にもできるのではないか。古里徳島で。ピアノの生演奏を聴いたことがないような地方の学校へも行き、音に触れて何かを感じてもらえたら」

リスト音楽院での恩師ゼンプレーニ先生も「タカコは子どもとの相性がいい」と言ってくれた。

出身校の小松島市新開小学校で第1回の学校コンサートを開いたのは、2001年9月11日。留学中に一時帰国した際のこと。鮮明に覚えているのは、ニューヨーク同時多発テロが起きた日と同じだからだ。

ハンガリーでの苦労や経験を子どもたちに話すうちに、学校コンサートには「人権」や「平和」という文字が付くことも多くなった。広島原爆で被爆したピアノを使ったこともある。

「子どもたちに伝えたいのは、時間を大切にして、自分の好きなことを見つけてほしいということ。そして、人への感謝。夢や希望も持ち続けてほしい」

ハンガリー音楽を中心にした自主公演のリサイタルを始めたのは、やはり一時帰国した1998年。徳島市の音楽喫茶「みき」での小さなコンサートだった。その後、まさか大ホールでも開くことになるとは、当時は考えてもいなかった。

ハンガリティックコンサートと名付け、ソロ演奏にこだわったリサイタルは回数を重ね、昨年12月、19回目の公演を済ませた。コロナの影響で開催が危ぶまれたが、どうしても50歳の誕生日を迎える今年11月までに20回目のコンサートを終えたいという強い願望があった。「逆境に負けない」。子どもたちに繰り返し、伝えてきたことの体現でもあった。

学校コンサートとリサイタルは表裏一体。「子どもたちに本物の演奏を聴いてもらうために練習に打ち込み、それがリサイタルの演奏で昇華される。この賞は、まだ走り続けなさいという激励かもしれない」。今年も両輪に全力で取り組む覚悟だ。（柏木康浩）